



## 灰色かび病予防の 特効薬的なイメージ。 可販果率が向上し、 収益もアップしました。

熊本県八代市  
小林 和弘さん

【プロフィール】  
2019年より八代地域農業協同組合北部野菜果実  
選果場利用組合トマト部長として活躍。  
トマト(桃太郎ピース)95a、水稲1.3haを作付。



パートさん、外国人技能実習生(前列2名)となごやかに。

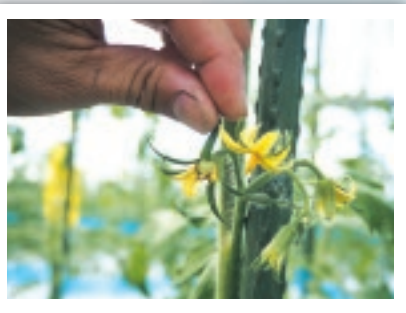
### 早めの摘果作業で、 養分を最大限に活かす

冬春トマトのトップ産地JAやつしろ管内で  
トマトを経営する小林さん。栽培のこだわりの  
ひとつは、「早めの摘果作業」で、まだ花芽の  
小さい時から摘果し、1房に果実を3つ残して  
しっかりと育てること  
で養分を最大限に活  
かすそうです。

「通常はピンポン玉  
ぐらいのときに摘果す  
るんですが、うちでは  
小さな果実が見えて  
きたころに摘果してし  
まいます。小さなうち  
に摘果すれば、残す方  
の果実に早めに養分  
を回せるし、摘果の労力も少なく済むので  
効率的なんです」。

小林さんはお父様のほか、パートさん1名、  
外国人技能実習生2名と一緒に15棟(95a)  
のハウスを管理していらっしゃいます。2名の  
外国人技能実習生はベトナムの出身。言葉や  
文化の違いがあって作業の細かいニュアンス  
を伝えるのは難しく、できるだけシンプルな指  
示に徹しているそうです。

「例えば摘果作業では、なかなか細かい



取材時の9月上旬、桃太郎ピースの果実は豆粒大に。

ニュアンスは伝わらないので、シンプルに『3個  
だけ残してあとは取っちゃって』と教えていま  
す。ベトナム人の技能実習生は、勤勉な人が  
多く、作業の覚えやすさも早いんですね。

そんな小林さんは、簡単なベトナム語を覚  
えて会話の中に取り込んだり、食事会や旅行  
などを通じてコミュニケーションを図るなど農業を  
通じた国際交流にも貢献  
していらっしゃいます。

### 灰色かび病が 出にくくなって、 可販果率がアップ

小林さんの農園では、  
10月中旬から翌年6月下  
旬まで大玉トマトを収穫。

ハウスを閉め切る時間が長くなる12月から2  
月ごろまでは、内部の湿度が高まり、灰色か  
び病などの病気が発生しやすくなるのだそう  
です。とりわけ灰色かび病の防除は重要、と小  
林さん。しっかり防除しておかないと、春先の  
可販果率に影響するのだとか。

「灰色かび病は予防が大切なので、こまめ  
に換気を行うほか、病気を出さないように  
しっかりと防除します」と話す小林さんは、12  
月から翌年2月までの灰色かび病重点防除期

間に、ローテーション防除の中でアフェットフ  
ロアブルを3回使用していらっしゃいます。そ  
の理由について小林さんに伺いました。

「灰色かび病の初発時期は12月上旬から  
なので、最初は予防効果が高いアフェットで。  
その後、1月と2月に1回ずつ予防として使いま  
す。8年前から使っていますが、アフェットを  
導入してからは、灰色かび病が出にくくなっ  
ているし、可販果率がアップしましたね」。

以前は、灰色かび病の治療を目的として殺  
菌剤を使うことも多かったという小林さん。ア  
フェットの導入以降は、そうした治療的な防除  
は必要なくなったと言います。

「アフェットは、灰色かび病予防の特効薬的  
なイメージがあります。葉かび病やすずかび  
病を同時に抑えてくれるのも安心感がある。  
以前より可販果率がアップしたことで収益  
アップにつながっています」。

やつしろ地域の生産者やJAとともに技術の  
レベルアップを図っていききたい、と小林さん。  
その力強い言葉に、農業への熱意と産地の  
プライドをひしひしと感じました。

#### 〔産地情報〕

量の原料となるイグサの生産地としても有名な八代  
市は、温暖な気候、干拓地特有のミネラルや塩分を  
多く含んだ土、球磨川の水など、トマト栽培の環境に  
恵まれた、日本を代表する冬トマトの生産地です。

### 小林さんのアフェット®フロアブルの使い方





## 灰色かび病の重要な防除期間に。 汚れも少ないから安心です。

熊本県宇城市  
山下 義男さん

### 【プロフィール】

JJA熊本うき トマト専門部会に所属し、アンジェレ研究会の会長としても活躍。奥様、ご長女、パートさんとともにミニトマト(アンジェレ)35aを作付。



収穫期を迎えたアンジェレ。果型は特徴的なプラム型。

### 自家育苗で、人気のミニトマト「アンジェレ」を栽培

『アンジェレ』というミニトマトをご存知でしょうか？ 糖度が8~10度と高く、ハタなしで収穫でき、スナック感覚で食べられることから消費者からも人気の品種です。市場でも従来のミニトマトより高値で取引されるのだとか。

取材で伺ったのは、アンジェレ研究会の会長を務める山下さん。自ら播種、接ぎ木を行い自家育苗で約7千本のポット苗を仕立て、35aの圃場に定植すると言います。

「苗がしっかりとしていないと本圃でもきちんと生長しないので、自家育苗で一株一株を丁寧に育てています。でもは種、育苗は真夏にやるから、ハウスの中の温度管理を上手にやらないと、接ぎ木の段階で枯れてしまうんです」。

また、収穫時期には2週間に1回程度の割合で20センチずつ段を下げて誘引を行い、自分のへその位置ぐらいに房が来るように主枝をピンクリップで止めていくのだそうです。

「一房に30個ぐらいの実が成るんですが、へその位置ぐらいに成った方が収穫作業がしやすい。液肥の葉面散布や防除だって同じです。腰ぐらいの高さにあった方が散布作業がしやすいですから」。

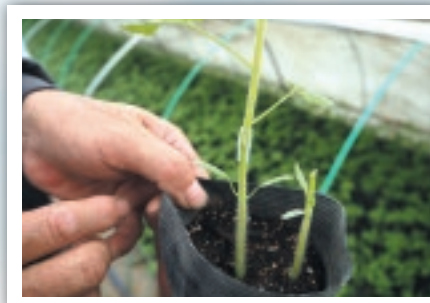
アンジェレの収量は、研究会の平均で10a

あたり8.2トンのところ、山下さんは10トン以上なのだとか。しかもいちばん価格が高いMサイズの比率が90%以上になると言います。

### 葉かび病も同時防除できる重要な予防剤

山下さんがアンジェレの品質管理で重視するのが、灰色かび病や葉かび病などの病害虫対策。7段目の収穫が始まる年明けごろからは樹勢が落ち始め、春ごろまでは灰色かび病のリスクが高まってくるので、予防防除が欠かせません。また、7段目以上になると、下葉から上位葉に向けて葉かび病が広がりやすいため、下葉の摘葉は重要なのだそうです。

そんな山下さんが以前より、ローテーション防除の中で1月から5月までに3回使用しているのがアフェットフロアブル。自走式農業



接ぎ木も自ら作業。ポットの右に残っているのは切断された穂木。

散布機で散布していらっしゃいます。

「1月以前の時期の灰色かび病防除は、比較的低コストな薬剤を使っておいて、1月からの重要な防除期間は、効果の高い予防剤を使うんだ。アフェットは、その中でも信頼のおける重要な予防剤。葉かび病とか、すすかび病も同時防除できるので便利ですね」と山下さん。また、以前に使っていた薬剤の中には白く汚れが残りやすい水和剤もあり、出荷する際に汚れを拭く手間がかかっていたこともあったと言います。

「アフェットは汚れが少ないから、すごく使いやすい。安心感があるんです」。

「アンジェレ」を国内ではじめて本格的に手がけたのは、JA熊本うきで、現在はアンジェレ研究会27名全体で8.7haが作付されているそうです。「ゆくゆくは研究会全体の面積を倍にしたい」と目標を語る山下さん。アンジェレの可能性を広げるリーダーの動向に、期待はますます高まります。

### 〔産地情報〕

宇城市のミニトマトの「アンジェレ」は糖度が8~10度と高く、ハタなしで収穫でき、スナック感覚で食べられることから消費者からも人気の品種です。市場でも従来のミニトマトより高値で取引されています。

### 山下さんのアフェット®フロアブルの使い方





【プロフィール】  
夕張市でメロン、ミニトマト栽培を営む農家の3代目。海外への農業研修後、2005年に実家に就農。メロン(夕張キング)2.3ha、ミニトマト(キャロル10)20aを栽培。

# 病気をしっかり抑えるアフエットは ミニトマトはもちろん、 メロンにも重宝しています。



ミニトマトは生産部会で統一した品種を栽培。



## 先人の情熱を継承

北海道中央部南西に位置し、かつては炭鉱の街として栄えた夕張市。現在は赤肉メロンとして抜群の知名度を誇る夕張メロンの産地として知られています。

夕張メロンブランドが信頼を得ている要因の一つが、生産者から選ばれた検査員が行う検査。栽培に携わる生産者自らがチェックするので見る目は厳しく、ネットの出来や熟し具合、糖度など、少しでも基準に満たないものは除外されます。このような厳格な体制が夕張メロンの品質維持に繋がっています。

「今の夕張メロンがあるのも、先代の人たちの苦勞と努力の積み重ねがあったからです」と話すのは、この地でメロンの栽培に携わる佐藤博行さん。地元の農業高校卒業後、一年間の海外農業研修を経て、お祖父さんの代から農業を営む実家に就農し、手間暇をかけて栽培に取り組んでいます。「私たちが青年部の集まりや勉強会、生育の見回り等の場で常にメロンの話をしています。先輩たちの熱い想いもひしひしと感じますし、大切なブランドをこの先も守ってきたいです」。

## アフエットの適用病害の 広さに安心

佐藤さんがメロンと並行して力を入れているのがミニトマトの栽培です。「ミニトマトの栽培は10年ほど前から始めました。メロンに比べまだまだ歴史の浅い作物ですが、メロンの後作の

特産物として、育成に力を入れています」。

今年(2022年8月現在)、佐藤さんは5棟のハウスで1,800株のミニトマトを作付。6月に定植し、8月上旬から10月中旬にかけて収穫を行います。夕張は山間で冷涼な気候ということもあり、「6月まではまだ寒く、その時期に病害が大発生することはまずありません」と話す佐藤さん。通常、病害防除は7月頃から開始されるのですが、「年によってはうどんこ病や葉かび病が6月くらいから発生することもある」と言います。「病害は防除を怠るとあっという間に広がってしまうため、毎日のハウス内の確認は怠りません。長雨や湿度の高い日が続く、発生の予兆があった場合は防除を徹底します」。



取材時の8月末はミニトマトの収穫時期。ご自宅の倉庫ではご家族と作業の方が選別に動かしむ。

佐藤さんはミニトマトの病害防除の基幹剤としてアフエットフロアブルを使用。その理由に「適用病害の広さ」を挙げます。「ミニトマトは葉かび病や灰色かび病など、見た目が似た病害が多く診断が難しいですが、アフエットはそれらを

同時に防除できるので安心できます。まさに、万能の殺菌剤という印象です」と笑い、効果についても他の予防剤とのローテーションで「ほぼ抑えられる」と信頼を寄せています。また、「汚れの少なさに」についても、メリットを感じたそうです。「以前使用した剤では果実の表面が汚れてしまい、汚れを拭く作業に苦勞したこともありましたが、アフエットは汚れも無く重宝しています」。今ではメロンのうどんこ病防除にもアフエットを使用しているそうです。

## 産地を盛り上げるために 新しいメロンの作型にチャレンジ

佐藤さんは今年初めて収穫を8月末まで延ばしたメロンの作型にチャレンジしました。「私その他、10軒ほどの生産者で試しましたが、通常のお盆までに収穫を終える作型とは育ち方が違ったり、害虫も多く出たりと、難しさを感じましたね」。それでも、今年苦勞した分、「来年はもっといいものを作りたい」と前を向く佐藤さん。夕張メロンを一流のブランドに築き上げた先人のフロンティアスピリットは脈々と受け継がれています。



今年初めて挑戦した8月末収穫作型のメロン。「取り組んだ生産者同士で意見を話し合っ、来年はもっといいものを作りたい」と佐藤さん。



## 佐藤さんのアフエット®フロアブルの使い方

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
栽培ステージ					は種	定植			収穫			
病害発生時期								うどんこ病 葉かび病 灰色かび病				

**アフエット®フロアブル  
処理時期**

1シーズンに1~2回ほど、ローテーションの中で使用  
(病害の発生条件が揃ったときは3~7日に1回のペースで殺菌剤を散布)

### 〔産地情報〕

夕張メロンでお馴染みの夕張市ですが、古くは炭鉱向けにナス、キュウリ、スイカなどの野菜が作付されていました。現在、ナガイモ、ミニトマトなどの作物が特産品として育成されています。